

親をちと我親としてつかへる道じゃ。其大切を舅姑御は御病氣のときに急かき花おすび、茶や花では御介抱は出来ませぬ。出入の按摩やをなご衆とやらす嫁御が真実親だちの肩こしとまですすりして御介抱なさるが、嫁御の道でござります。其道の修行に按摩の御醫古はまじかと申したのであります。とかく役に立つ御醫古が肝要じやといはれまして。

「風が吹けば桶屋が喜ぶ」と心学道話にいつている。「風が吹けば砂ほこりがたつ。それが眼にはいつて眼をわすらう者が多く、盲目がふえる。ござが多くなるので三味線がどんどん売れる。三味線の皮がうるため猫がこみされて猫がへる。猫がへると鼠がふえる。ふえお鼠が桶をかじるので、いって桶屋にもつていく。桶屋は商売繁昌で大喜び。」

人は孤独にあらず、世はすべてに関連ありである。明治の幸田露伴の「天うつ波」に、

あゝ世は綱よ、われはそもその綱の一目ぞ、我が家
のいとし焼くときに、とまりの梅に香りなく、とな
りの稚児のなくとともに、我が酒まづく味もなし。
(ちと語句に記憶ちがいがあるかもしれん)

ある人、あるもの持ちに金を左むる秘訣をきいた。こ
れで井戸の水をくんでんなどい、とよいつるべと底ぬけ
の桶をくいた。なんぼくんでも水がたまらぬ。じやこれ
でやつてみなさいと、かえてくいたのは桶は立派だがつ
るべは破れている。しかしだんなんやつていこううちに、
水がたまりだした。大金をもうけてもパツパツかつた
らたまるところではない。千チンもうけてもつづまし

くつかつていたら、塵もつもつて山となる。これも心学
道話の訓である。

この盆前、俊卿先生の嘗源におたる芳子刀自、夫君竹
中第一先生と宮野浦にお出でになられて、おほおほぢの
所とを訪ひ、私の茅舎におこし下された。
竹中先生は近畿大学の教授で、心学と経済学的に研究
されて経済学博士の学位をとられていられる方である。

大正十年五月八日、俊卿先生趣く。齡九十一。
先生は御土々生んだ大偉人である。戦前官小學校の職
員室には、先生の肖像がかかけられていた。借問す。其
の字真、今なお健在なりや。

戦争にまけてから、日本人は国家や郷土の偉人を忘れ
ている。それは末だしも、教育勅語をけいべつし、毛沢
東語録を読む若者が多い。

戸穴高林伝男先生が、宮野浦生れでもあらうか、先
生が私にあらうなむに山田俊卿先生の事をかけかけいわれ
る。かきますかきます、といえどまたかかん。こらえて
下さい。
(以上)

随録

天の網島大長寺物語

一 秀吉と矢張毛利

大阪 馳川 比 志

天正十四年——十四年ぶりに近畿の山河は、森備前守
定春を迎えた。山容水姿は昔ながらの條を存していたが、

郷人の生活にはその豪華な桃山文化と後にいわれるものの背景の移りが見えて来た。見るもの聞くものに、十四年前とは全く別世界の観で、さながら浦島太郎の驚きにも似ていた。

「聚楽」で秀吉に謁見した備前守は、皆に長州淀川下流に一顧を賜った。

領内一帯より大坂城を眺めて定春の郎は悲涙を隠して城門に對し、裏は淀川の大流が壺かな水と湛えていた。定春は近江の故城に因んで領内一帯を「鯉江」と称し、自ら「一森」と「鯉江」と改称した。

郎の所生地を後世呼んで備前守の郎跡というので「備前島」といった。

大公御威という意味から名付けられた御成橋が明治十八年以來「備前島橋」という名に改められたが、いつのことが廣屋川に併行して流れていた鯉江川を埋立てて、京橋より更に北へ渡つていゝ。この備前島橋もなくなつて、今は京阪電車のリールの下敷になつてしまつた。

さてこの備前守定春とは何者であるか、時は元龜・天正の群雄割拠のいわゆる戦国時代で治乱興亡、今日を明日へも測り難いのは諸侯の運命であつた。その昔かに江州愛知（えち）郡鯉江の城主森定春の運命もそれであつた。柴田勝家の猛襲によつて龍城大幸、萬曆の一十一が消れるが如く、潮退の波に没してしまつた。

森備前守には女を取り交せて四人の子供があつた、長子と高政、次子と兵橋、末子と二郎左衛門といつた。兵橋と二郎左衛門とに間に藤原という女児があつた。鯉江落城當時、高政は十八、兵橋が十五、藤原は八歳、二郎左衛門は頭長ないふところを過ぎなかつた。

居城を奪われた定春は近畿の地には寸土の安住の場所

もなく、流転の身を西へ西へと山陽道をながれていつた。そして當時東の織田に對して隠然たる勢力をまていた、芸・備・長・防を統一している毛利輝元とたよつたものであつた。かくして定春一家は、当分芸州の豊田郡御館小水路に数度の余生を送ることになつた。

こうしてゐる内に世は改弦きままりなく、不平だつたの目高政、兵橋の兄弟であつた。がが鞠部如として、頭の上のぬ輝光こそは高政に比べて勝か三ヶ年上か青二才に過ぎなかつた故に、何んとして心なかなかの不満を消すわけにはゆかなかつた。

「兄上、都へ上つて何とかな一旗揚げようじやないか。」
「ウン、そうしよう！ けれど父上には済まない。が折角、男と生れたからには、このまま、こゝ田舎に朽木果つる氣になれない。」

とこの二十才前後の二人の若ものは都へと上つていつた。そうして當時旭日の勢いで羽振を利かせていた羽柴秀吉に仕えることになつた。こうして秀吉と森高政兄弟との因縁が結ばれた。——とこの随筆の資料の一つとなつた高松慶三氏（大坂毎日新聞社員、大正七・七・九—一八日迄朝刊連載）の「大長寺と矢筈毛利」の「豊公門閥の哀話」のなかに述べられているが、矢筈毛利の領地は豊後佐伯で、その藩主などによると、元祖高政公は母瀬尾氏の連れ子（豊臣秀吉の庶長子とも伝えられ）として森高次に嫁したといはれてゐるが、その真否は判らないとしてある。而し「定春」と「高政」とが同一人であるかどうか、佐伯藩史がまちがつてゐるのかそれと判らない。

いずれにしても、秀吉の中国征伐の話とも大出さぬ皮なうない。

かの高松城攻めの苦しい先頭に立つてゐた彼に、青天

の霹靂のシヨツクは、信長の本能寺事件であつたが、この凶報は彼にとつては却つて運賦天賦の賽こゝろであつた。

彼、秀吉は西の強敵毛利軍と和する条件に苦慮したが、人質をもつて、充分に補うておまゐる人物を選んだ。それこそ森高政兵衛の兄弟であつた。而も高政兄弟が長州毛利に受けとられて、どうもうちに待遇されなか。弟兵衛はどうしたのか消息が伝あつてまいが、高政は輝元の仇受と素敵によかつたので優遇ならざるなく、「森」と「毛利」と同音相通するとして「毛利」と改姓させ、一族の外に知え只家紋は区別して、毛利本家メ「三ツ星に一ハ字」に對し「森」の毛利は昔通りに「丸に矢」に紋所とした。

そうして毛利高政は關ヶ原の戦に徳川方に服したため辛うじて伝来の家系を保存することが出来て、外孫大名として慶長六年、豊後佐伯メ莊（大分県佐伯市）に移封された。これが「矢筈毛利」で、私の父の家系は川氏系で、國には「高政」の妹（安子メ方）を娶つて佐伯に住すゝとなつてゐる。佐伯藩毛利氏系圖には高政の兄弟は吉安へ森左郎左衛門尉という弟と、末メ妹安子と、門下一人メ「妹」が記入されてゐる。これが問題の「藤姫」であるのかどうか詳らかでない。

この大長寺を語るために秀吉が定春を京阪の地に呼ぶ出すに到つた終緯を語らねばならぬと、高原著述には「秀吉の心理」をかいてゐる。

天正十二年、大阪の東天に難攻不落の大坂城を完成し、次いで關白の榮位、人臣の極位に登るに到つたが、折にふれ時に臨んで、三年前、高松和議當時の乾坤一擲、果斷を思ひ出すその都度、背筋を通る冷めたいものを感

るゝであつた。そしてその時の森兄弟。人質として兄弟への思いは、ただ左に何と云つてこの森一族に報ひべきかて頭一杯であつたが、毛利家に對しては、さすがに秀吉も人質という名目に對してこれ以上立入ることは出来なかつた。

そこでふと悪い出したのは「兄弟の父、定春が確か芸州に居る筈だ。これを大阪へ呼ばう」ときめた。然し老いたる定春は何の地位も望まなかつた。左に世の外安樂を唯一の樂としてゐるので、秀吉の申出を礼を厚くして堅く断つた。おまゐるないのは秀吉であつた。そして強行手段を講じて「關白大關殿下の命令」として、當時二十才の藤姫を定春の手許よりもどしてしまつた。この藤姫こそ、大關秀吉のこよなく愛撫した当人であつた。終には再三の使者となり定春を上洛せしめようとした。この秀吉少かりの總江家と定春の死後、藤姫はその後嗣がなかつたを以て断絶してしまつた。

かくして佐伯藩主毛利高政は總江家及落後、田鑑江郎の一節に一字の菩提寺を建立した。これが昔の「大長寺」で、今の大關園の一節にあつたもので、藤田氏が富力により今の栗野田に移転改築したという。寺の定紋として「丸に矢筈」を用いてゐる。

（筆者佐藤長谷川等）

（福康子日記）本稿は去る八月長谷川博士からいただいた「佐伯藩の歴史」に載つてゐた。佐伯史談会関係の人物に「方」に記してゐる。時に考へて今号に掲載することにした。本稿により藩祖高政の家系背景というものが更に明らかになつた感がある。尚長谷川博士は幼少時代佐伯の各地へ通され、佐伯中屋第三回卒業生。佐伯大坂中屋第三回卒業生。